本多静六通信
第31号
発行
本多静六博士を顕彰する会

本多静六博士の勇気と信念に学ぶ

公益財団法人　都市防災美化協会理事長　中島　宏

本多静六博士の勇気と信念に学び、公園緑地と共に歩んできた私が、本多静六賞を受賞できました。

この度、第十五回本多静六賞受賞の感想、造園分野からみた本多静六博士の業績、本多静六をモチーフとしたエッセイなど、本多静六博士に関連した内容で「本多静六通信第三十一号」への執筆を依頼されました。

受賞の感想といえば、トラ年に生まれた私が、しかも五黄のトラ年に公園の父とも言われております、本多静六博士の賞をいただけましたことは、光栄であり夢のようです。この賞を受賞できましたのも、埼玉県知事大野元裕様はじめ県職員のみなさま、久喜市市長梅田修一様はじめ顕彰事業関係者のみなさま、選考委員会委員長小川秀樹様はじめ選考委員のみなさま、そして推薦者の埼玉県職業能力開発協会会長岡村藤美様はじめ埼玉県造園関係者のみなさまなど、多くの皆様方のお蔭と心から感謝申し上げております。本当にありがとうございました。

今年の本多静六賞に
造園技術者中島さん
巨木の移植などに尽力

県は26日、緑と共生する社会づくりに貢献した個人や団体を表彰する「本多静六賞」の表彰式を開催した。今年は造園技術者の中島宏さん（68）＝さいたま市＝が受賞。中島さんは文化財庭園の管理などの経験を論文にまとめ2017年度に日本庭園学会賞を受賞し、ものづくり大学などで造園技術者の育成に取り組んできた。

大野元裕知事は「本多静六賞で初めての造園分野での受賞者だと中島さんをたたえ、「本多先生と同じように巨木の移植を成功させたエピソードに感銘を受けた」と述べた。中島さんは01年の都市博覧会「山口きらら博」に際し、伐採される予定だった樹齢120年の巨木の移植を成功させた時のことを「本多先生の気持ちが降りてきた」と振り返り、尊敬する本多先生の賞を受賞し、涙が出るほどうれしい」と喜んだ。

本多静六（1866～1952）は久喜市（旧菖蒲町）出身で日本最初の林学博士で、森林や公園の造成に尽力した。同賞は県が07年に創設し、これまでに県ゆかりの林業経営者や県立浦和高校同窓会など16の個人、団体に贈られている。（伊藤明日香）

大野元裕知事（右）から本多静六賞の表彰状を受け取った中島宏さん（中央）＝28日、さいたま市浦和区

埼玉新聞 2022 5/27 (金)

図1 埼玉新聞2022年5月27日朝刊

■日本の公園史に大きな影響

明治六年（一八七三）の太政官布達で、「公園」という用語が初めて公式使用されて以来、令和五年（二〇二三）には百五十年になります。

明治元年（一八六八）、徳川将軍家による江戸幕府が崩壊し、天皇を中心とする明治新政府が成立しました。その新政府によって、政治、経済、社会において大きな変革の時代が始まり、近代化と西洋化をもたらしました。そのうちの一つとして、公園という概念がなかった時代に、国の最高機関であった太政官が、いち早く明治六年（一八七三）の太政官布達により日本の公園制度を発足させました。なぜかという疑問にたいしては、外国人の発言を重視し、召し上げてきた徳川色の強い江戸の名所を選び、そこを今まで存在していなかった西洋式公園にすることで、江戸が終わり新しく東京として生まれ変わる近代化のシンボルとして国民に浸透させようとしたのではないかと推測しました。しかし、明治六年の太政官布達公園は、江戸時代の社寺境内地のような「群衆遊観ノ場所」を新たに公園としたものであり、レクリエーション地としては機能しても、近代的な公園という意味では程遠いものがありました。その後、明治二十一年（一八八八）十一月の東京市区改正委員会において、陸軍日比谷練兵所跡を公園にすることが決定され、明治二十二年五月に日比谷公園が告示されました。日比谷公園の設計は、明治二十七年に日本園芸会に委託されましたが採用されず、その後も辰野金吾博士を含めて多くの人々に委託不採用が繰り返されることになりました。前例のない難航を極めていましたところ、明治三十四年（一九〇一）に本多静六博士に委託され、その案がようやく市会で可決されました。日比谷公園の設計に、こ

れほどまでに歳月が費やされた理由について、東京市や日本園芸会の案は純日本式庭園をモデルにした築山林泉式であって当時の欧化思潮に歓迎されなかったこと、辰野案は逆に西洋の都市広場そのもののようで単純すぎたことなどがあげられました。それに比べて本多案は、専門の造林学とドイツ留学の経験から従来の神社・仏閣に由来する公園とは異なる自由な場としてのドイツ風樹林と運動場、花壇等からなる近代洋風公園案でした。

本多博士に委託された面積約十六ヘクタールの日比谷公園の設計は、すぐに出来上がりましたが、池は身投げの名所になりはしないかとか、門に扉をつけないと花や木が盗まれるのではないかとかなどと、非難や注文が続出したり、予算がなくてただ同然に農科大学から払い下げられて植えた小さな苗木も、今では高さ二十メートル、幹周り四メートル余りに大きく成長し、ビジネス街に囲まれた緑のオアシスとして多くの人々に親しまれている東京都立の中央公園になっております。

わが国最初の「洋風公園」となった日比谷公園の設計は、その後の新設公園設計に多大な影響を与えているばかりでなく、林学や農学出身の人々が公園設計に携わる契機ともなりました。本多博士の影響は、昭和三十九年（一九六四）の東京オリンピック第二会場事業にも引き継がれております。

図2 完成時の日比谷公園平面図

■本多博士の人柄が偲ばれる庭園

「天災は忘れたころに襲ってくる」は寺田寅彦の名言ですが、昨今の状況は忘れる暇がないくらい、次々に大地震が発生しています。そのような中、都市防災を考える上でなくてはならない存在が公園緑地であります。そのきっかけとなったのが相模湾を震源とする大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災であり、令和五年（二〇二三）には震災後早くも百年になります。

未曽有の被害は、東京を中心に千葉、埼玉、静岡、山梨、茨城、長野、栃木、群馬の各県に及び、死者・行方不明者十万五千人余、焼失家屋二十一万戸余に及んだといわれています。

火災で焼失した区域の周縁を「焼け止まり線」と称していますが、関東大震災の場合、東京の公園緑地等が焼け止まりに関与した部分は、被災地全体の約三十パーセントであったといわれています。上野公園、浅草公園、湯島公園、小石川後楽園、皇居外苑、日比谷公園、浜離宮庭園、芝公園などですが、焼け止まりによって救われた命は、約一千六百万人ともいわれ、上野公園では約五十万人、皇居外苑では約三十万人、芝公園では約二十万人、日比谷公園では約十五万人が救われました。

関東大震災で避難地となった広場などの安全性についてみると、同じ四万平方メートル程度の敷地面積で、所在地も近い深川岩崎邸（現、清澄庭園）と本所旧陸軍被服廠跡（現、横網町公園ほか）を比較してみると、深川岩崎邸では死傷者が少ないものの、本所旧陸軍被服廠跡では多くの焼死者を出しています。深川岩崎邸には、外塀の周囲にスダジイやタブノキ（イヌグス）などの常緑広葉樹を主体とした植込みがあり、庭の中央部に池がありました。それらが火流の勢いを抑え、避難していた一～二万人余の命を救いました。一方、本所旧陸軍被服廠跡は、空き地で樹木がなかったために、南から迫った炎が大旋風となって避難者を襲い、三万八千人余の死者を出したのです。近くにあってほぼ同面積の両者の明暗を分けたのは、外でもない「樹木の存在」の有無でした。

関東大震災の惨事の中で比較的避難効果があったのは、林泉式日本庭園でした。このことからも、惨事による不言の警告を将来に残すために、震災後、横網町公園には、犠牲者のために住民の寄付により慰霊堂が建設されましたが、同時に、本多博士により「樹木の大切さ」を象徴する緑の多い林泉式日本庭園も整備されて、緑を愛した本多先生を偲ぶよすがとなっ

ています。

■オリンピックと緑豊かな会場

昭和二十七年（一九五二）四月、サンフランシスコ講和条約発効とともに、我が国は独立を回復しました。

昭和三十年（一九五五）代に入り、舗装されていない道路を三輪車や路面電車（ちんちん電車）が走る時代に、東京都の人口はふくれあがり八百万人を超えて、昭和二十年代初頭の倍に達するとともに、日本経済も順調な回復と同時に財政基盤の充実を反映して、東京都では昭和三十二年以降、公園の戦後の復興復旧から新規造成時代に入りました。このような情勢下で、第十八回オリンピックは、昭和三十四年のＩＯＣ総会で東京大会開催が決定され、オリンピック東京大会第二会場に選ばれた駒沢公園では、バレーボール、レスリング、サッカー、ホッケーが開催種目に決定されました。

昭和三十六年（一九六一）四月に、「駒沢運動公園の基本計画に関する研究」報告書がまとめられ、それに基づいて、駒沢公園の整備事業は、工事の設計、監理業務を直営で行うことになりました。同年五月、公園敷地内に東京都オリンピック施設建設事務所が発足し、駒沢体育館と駒沢陸上競技場の基本設計、実施設計が委託され、三十六年度には、主要排水管の埋設、および盛土工事などに着手し、一方では、千本の植栽用立木の買い付け、根回しや保護育成が行われました。

昭和三十七年三月に、基本計画の樹木を多くした静的な雰囲気をつくるために体育館と陸上競技場のほぼ半分ほどを地面を掘り下げた場所に建設する設計書が提出されました。

昭和三十七年四月、幸いなことに私は、東京都オリンピック施設建設事務所に就職し、またとない大事業に参加することになりました。基本計画の樹木を多くして静的な雰囲気をつくるという考え方に基づいて、建築・土木・造園の工事が一斉に開始された大事業の幕開けでした。

初めて携わった仕事は、三十六年度から探し求めていた幹回り六十～百二十センチメートルの大樹千本のうちの一部を千葉県に見に行き、買うことになった樹木（マテバシイ、ヤマモモ）の樹高、葉張、幹回を目測で測って台帳に記入し、樹木の下枝の上に東京都のマークと番号をつけたことです。続いて、競技施設の基礎工事、道路築造工事が相次いで行われていましたが、道路や園路の街路樹は、大会時までに整然とした美しさを作り出す必要上、道路工事中に並行して、貫通道路には購入樹木のイチョウ幹回り六十～百二十センチメートルのもの十五本、主要園路にはケヤキ幹回り六十～九十センチメートルのもの百十五本、延長千百メートルに及ぶ植栽を完了しました。

翌三十八年度には、三橋一也造園課長のもとで組織が拡大され職員の増員が図られました。しかし、植栽の設計・施工監督については、直営で行う時代でしたので、職員の増員に対して植栽担当の上司であった村木氏が、すでに進めてきた設計・施工の統一性等が損なわれると猛反対をされ、前年度に引き続き村木・中島の二人だけで、駒沢公園（面積約四十ヘクタール）のすべての植栽の設計・施工監督を担当することになりました。その時に、村木氏から本多博士の勇気と信念について聞かされた私は本多博士の意気に感じ、植栽設計・施工にあたり、①緑に囲まれたスポーツセンターとすること、②巨大な樹木を使用すること、③工期を短縮するために、機械力の導入を図ること、④巨大な建築物に対応する日本庭園の手法を採用すること、⑤日本の郷土樹木・草花を主として伝統樹芸も採用するという村木氏の意見に同意しました。

植栽工事では、十区画に分割して同時に着手しましたが、建築、土木も併せて約八十の建設業者が集中したこともあり、敷地全体が輻輳（ふくそう）を極め、設計・施工監督に加えて事業調整が重要な仕事となり

図3 駒沢オリンピック公園の全景　出典・駒沢公園パンフレット

ました。就職の前年三十六年度に購入した大きな樹木がトレーラ等で夜間に搬入されてくるので、車上で表裏や形状及び配植を判断して、レッカー車で直接立込みの指示をするため、事務所に泊まり込んで対応し、約二年間で完成することができました。植栽に要した樹木、灌木の総計は約十四万本、地被類の総計は約九万平方メートルで、昭和三十八年度内に全植栽を終了しました。

完成直後の評判記には、建築評論家川添登氏のこんな一説があります。「駒沢オリンピック公園での最大の功績者は、東京都の造園課であろう。数年前から、慎重に計画して植付けられた樹木や芝は、建築物の竣工と同時に、すばらしい緑をあたえている。（中略）あの広大な敷地に、見事に植込まれた樹木こそ、世界に誇ってもよい日本庭園技術の勝利である。」（朝日ジャーナル三十九・八・二十三）

このことからも、昭和三十九年東京オリンピックの会場となった駒沢オリンピック公園は、体育施設のデザインと中央広場の構成、そして植栽景観を機能的かつ美的に統一した自然で樹林本位の公園デザインになり、本多博士による明治時代の近代洋風公園と大正時代の林泉式を主にした日本庭園の影響を受けて、オリンピック大会を支えた日本の造園技術水準を世界に示した昭和時代の「造園傑作」、というより「造園遺産」ともいえるすばらしい公園になりました。

■蘇った大径木をめぐる移植物語

私は、月刊誌（ＴＨＩＳ ＩＳ 読売）に「首かけ銀杏の運命」と題した随想を平成六年（一九九四）に書きました。その随想の一部を紹介するのは、その当時、私がいかに本多博士の勇気と信念に感銘を受け、関心を持ったかという事の証でもあります。

――大地のぬくもりが戻ってきて、園内の落葉樹が一斉に色めき立つと、日比谷公園の春がスタートする。木々の淡い芽吹きは見とれるほどに美しいが、中でも私が毎朝話しかける老イチョウの芽吹きは感動的だ。公園内の中ほどにあるレストラン「松本楼」の前に植えられていて、天気の良い日の昼休みには、素人カメラマンに変身する私のかけがえのないモデルである。

老イチョウが現在の場所に移されたのは、明治三十四年（一九〇一）である。立地の日比谷交差点付近が道路の拡張工事にはいり、切り倒される運命にあったものを、後に日比谷公園の設計者になった本多静六博士が非常に惜しんで、伐採中止を議会に懇請し、危うく一命を取りとめた。その折博士が、「自分の首をかけて」移植を成功させると約束したことから、老イチョウは通称「首かけ銀杏」と呼ばれるようになった。

記録によれば、樹齢はおよそ四百歳、交差点付近の鍋島屋敷の庭にあった当時、すでに三百歳を超えており、とうてい移植は無理とされ、いったん業者に払い下げられて、地上から十一メートルまでに切り落とされていた。その老イチョウを助けるために首をかけて奔走した博士の熱意が通じたのであろう。移植地点まで四百五十メートルの距離の移植に二十五日間もかかるという大移植工事や、移植後の火災によるやけど等にもよく耐えて、命永らえ今も年輪を重ねている。今では寄ってくる小鳥もふえて十五種類以上に及ぶとか。（中略）輪廻の周期を異にする人や緑、鳥や昆虫が一体となって溶け込んでいる微笑ましい平和の光景を、命ある限り見続けていくことが、命永らえ、歴史の生き証人でもある首かけ銀杏の運命なのかもしれない――。

その後、昭和三十九年（一九六四）八月、駒沢公園の完成後、東京都公園緑地事務所工事課植物係に異動し、昭和四十年、国立博物館内の東洋古美術を展示する東洋館建設の折には、支障となる幹周三メートルの大イチョウを伐採せずに、伝統的技術である立曳法で移植して保存するという仕事にかかわりましたが、緑を大事に扱う建築家の心意気にも感激しました。

図4 イチョウの立曳き運搬
（昭和40年撮影被写体：筆者）

その折、私にとりまして日比谷公園の首かけイチョウの移植にも使われたと推測される立曳法に携わ

れましたことは幸せな経験でありました。

本多静六博士の「自分の首をかけて」移植の成功を約束し、保存することに成功したという首かけイチョウの伝説は、あまりにも有名ですが、そんな本多静六博士の勇気と信念の影響を受けて、私にも首をかけてヤマモモの移植・植栽に成功した忘れがたい思い出があります。

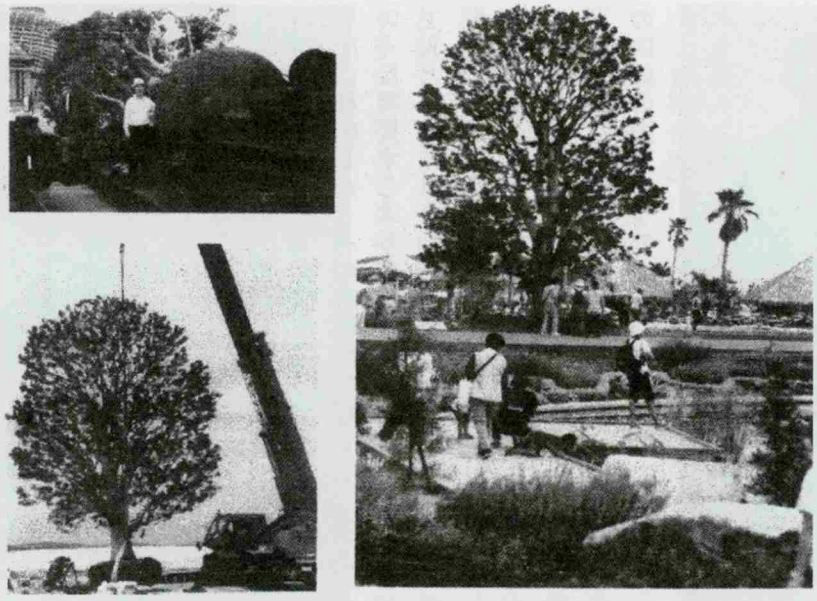

図5 ヤマモモの運搬、植付け、仕上がり
出典：改定緑化・植栽マニュアル

東京都を退職後の私は、日産化学の子会社である日産緑化に入社し、職員の荒井、堀口と共に植物と農薬や屋上緑化用土壌に関する調査研究、植物による水質浄化の実験などをしておりました。

平成十三年（二〇〇一）の都市博覧会「山口きらら博」（会期七月十四日～九月三十日）は、日産化学小野田工場創立百二十周年にあたりましたので、記念参加することになり、メインゲート正面の植栽の計画・設計から施工・管理までを日産緑化が任されました。樹齢百二十年余りの古木をメインにする構想を練り、計画書を山口県の担当課長に説明したところ、夏場の熱い時期に古木の移植は無理だとクレームがつきましたので、本多静六博士の言葉にならい「首をかけて成功させます」と申し上げたところ、「そこまで言うのなら任せる」との言を得て、樹木探しをはじめました。運よく宮崎県の区画整理事業で支障となり、伐採される運命にあった樹齢約百二十年のヤマモモ（高さ十二メートル、幹周一・八メートル、葉張六メートル）に出会い、枝を一本も切らずに一か月かけて枝を曲げたまま宮崎県から関門トンネルを経て、「きらら博」会場に運搬し、自然樹形に近い形で植付け、シンボルツリーとして景観美と癒し感を提供することができました。

博覧会後、短期間で観賞できる姿に仕上げ、同時に植栽した草花や水草と調和し、入場者に感動と賛同を与えたと、主催者からも評価していただき説得したかいがあったと自己満足した懐かしい思い出です。

■おわりに

本多静六博士の勇気と信念に学び、「みどり」とともに歩んできましたところ、あこがれておりました博士の賞をいただくことができ、感謝しております。この受賞を契機に、これまでの経験を生かし「公園緑地と共生する社会づくり」のために、「みどりの歩み」を進めて参る所存でおります。

第十五回本多静六賞
中島宏氏受賞について

埼玉県農林部森づくり課
主任　塩濱　瑠璃子

中島宏様におかれましては、第十五回本多静六賞の受賞、誠におめでとうございます。

中島様は、東京都庁に奉職後、公園緑地部長など数々の公園行政の要職を歴任され、退職後は、公益財団法人都市防災美化協会理事長を務められるなど、緑豊かで快適な生活環境の形成及び自然環境の保全の活動に尽力されています。

加えて、造園技術の論文や多くの技術書の執筆のほか、全国で三百回を超える講演を行うなど、実践技術の研究やその伝承、人材の育成に多大な貢献をされています。

今回、これらの業績が認められ、造園分野から初めての本多静六賞の受賞となりました。授賞式では、知事から、「中島氏の活動は、まさに本多静六博士の精神と実行力を受け継いだもので、感銘を受けました。」との言葉がありました。

末筆ではございますが、中島様の益々の御活躍とご健勝を祈念申し上げます。